

## 忘れ得ぬ人々

### ——その1 海外研究者編——

#### 辻 成史

回想録の類を書くことは本来私の趣味ではないし、今でも進んでそういうものを書き残したいとは思っていない。だが他方、自分もある程度の年月を生き、記憶力は衰えたものの過去のことをすっかり忘れてしまったわけではない。そんな折若い世代の方々から、自分たちが経験すべくもない過去のことをもっと書き残しておいて欲しいという声があり、自分でも、それはひょっとしたら元気で長生きした者の義務ではないか、と思うようになってきた。加えて、研究者としてさしたる業績を挙げたわけではないが、一応この仕事で長年糊口を凌いできたのは、一重にその道の優れた先輩方に巡り合った御蔭である。それらの方々の中にはすでに鬼籍に入られた方も多い。僭越ではあるが、これらの方々の思い出を語るとは、あるいは鎮魂<sup>よすが</sup>の縁ともなるのではと思い、筆を執ることとした。ただお断りしておきたいのは、私は一部の人々のようにまめに日記を付けたこともなく、今から50年も前のことを思い出しながら書くのであるから、勢い記述は不正確で過ちも多くあろう。その点をお許し頂き、今後ともご叱正を頂けるということでとりあえずの責を果たしたい。

80年の年月の間に出会った人生の先輩方の数は多く、とてもすべての方々について一律に記述を進めることはできない。しかし、今回怠惰な私を励まして筆を取るように勧めて下さったのは、主に私同様、西洋美術の研究に携わっておられるの方々である。もちろん、私の貧しい学殖の一端を支えて下さったのはこの領域での先輩方に限らないし、とくに日本、中国美術に関する親しみを養って下さった多くの先生方がおられる。それらの方々についてはこのシリーズの続編で語らせていただくこととし、まずは西洋の美術、文化について、研究者としてよちよち歩きだった私を、初めに導いて下さった西欧人の先生方の思い出から始めたい。

#### エロル・ローズ Erroll F. Rhodes 先生

思い立って、とんでもない御無沙汰を顧みずグリーンウィッチ・コネティカットにお住まいのローズ先生にメールでお便りしたのは一昨日のことである。その折、先生に最後にお便りしたのが5年前の2008年の今ごろ、8月の初めであったことに気付いた。それは、後に詳しく触れることになる私のプリンストン大学の恩師、クルト・ワイッツマン Kurt Weitzmann の代表的著作

のひとつ *Roll and Codex* の拙訳<sup>1</sup> が刊行された時のことで、私にとっては、ローズ先生こそ、拙いものではあるがこの訳本を真っ先にお目にかけたい方のお一人であった。いや、お一人というのは事実ではない。誰を措いてもまずローズ先生にこの書を見て頂きたかった。先生の御父上も聖公会の牧師として戦前日本に滞在されたと伺っていたが、聖職者でもあられたローズ先生も、ゆっくりではあるが流暢に日本語を話され、読まれ、時にはエッセイなどを執筆された。従って、この拙訳をお送りしても十分目を通して頂けると信じていた。先生からはその後間をおかずにお返事を頂き、「自分もすでに 84 歳になったが、元気で、ついこの間スウェーデンでの学会から戻ったところである」というお話であった。

私の思い出の中の最初の頃のローズ先生は、夏休みの一番暑い折、あまり人気のない、その頃新築なった立教大学の研究棟の部屋に籠り、何千枚かとも思われるカードを前に奮闘しつつ論文を書いていられる姿である。1958 年当時、日本の夏は今ほど暑くなく、エアコンなどは予め設備されていなかった。とはいえ、傾きかかった午後の日差しの降り注ぐ西向きの研究室は相当の暑さで、当時研究室が面していた立教中学・高校のグラウンドから聞こえてくる応援団のバンドの音や掛け声がいつそう暑さを加えていた。その中で、温厚ではあるが、大柄、長身の先生は、折々首に掛けられたタオルで流れる汗を拭きながら仕事に励んでおられた。後になって分かったのであるが、その頃先生はアルメニア語新約聖書本の注解付きリストの出版を目前にされていた。それは翌年 *An Annotated List of Armenian New Testament Manuscripts*<sup>2</sup> として出版され、今もアルメニア語福音書テキストの基礎文献とされている。その後先生は帰国されてからアメリカ聖書協会の研究部門を代表するメンバーとして活躍された。確か 2000 年には、New King James Version の Introduction を書かれている<sup>3</sup>。

これで分かるように、ローズ先生はシカゴ大学で聖書の本文批評を専攻された聖書学者である。*Novum Testamentum*<sup>4</sup> の編集者であるクルト・アラント Kurt Aland とともに親しく、また福音書研究者としてよく知られたブルース・メツガー Bruce Metzger<sup>5</sup> の後輩でもあり、親しく交わっておられた。因みにメツガー先生は、私がプリンストンに留学した時にはその地の神学校におられた。大学キャンパスに接したセミナリーの、白い大理石に覆われた小さな図書館はいつも静かで、学生でざわめいている大学の図書館とは対照的に、私にとっては勉強の場であるとともに憩いの場

<sup>1</sup> K・ワイッツマン、辻成史訳『古代・中世の挿絵芸術—その起源と展開』中央公論美術出版、2007 年。原著は K. Weitzmann, *Illustrations in Roll and Codex: a study of the origin and method of text illustration*, Princeton 1970<sup>2</sup>.

<sup>2</sup> Annual Report of Theology, Monograph Series, vol. 1, 1959, Dept. of Christian Studies, Rikkyo University, Tokyo.

<sup>3</sup> *The Translators to the Reader: the Original Prefaces of the KING JAMES VERSION of 1611 Revisited*, American Bible Society 2000 として単行本化。

<sup>4</sup> K. Aland et al. (eds.), *Novum Testamentum Graece*, Stuttgart 1991<sup>27</sup>.

<sup>5</sup> 邦訳は多いが、主著は以下。B・M・メツガー、橋本滋男訳『新約聖書の本文研究』聖文舎、1983 年；日本基督教団出版局、1999 年。

でもあった。そこでメツガー先生とも何時か言葉を交わすようになる。あの世代のアメリカの学者に見られる温厚さ、品の良さを湛えておられた先生は、私の幼稚な質問にも厭な顔一つされず、何時も親切にお教示頂いた。その後ローズ先生が御一家を引き連れプリンストンに遊びに来られた時は、緑に囲まれたメツガー先生のお宅での昼食会に私も混ざって下さり、旧師との再会を迎えたあの楽しいひとときの思い出は、今も忘れることがない。

話は立教大学時代に戻るが、大学院修士を終える頃の私は、大体毎日、次に述べる三浦アンナ先生の研究室をわがもの顔に使わせて頂いて、ほぼ一日をそこで過ごしていた。そこにある日ローズ先生が一冊の粗末な装丁の論集を手にしてやってこられ、ここにワイッツマンの論文が出ているから読んだら、と言って貸して下さったのが、1948年にシカゴ大学で開催された希語新約聖書テキスト研究のシンポジウムの報告書であった。掲載されていたワイッツマンの論文は "Narrative and Liturgical Gospel Illustration" である<sup>6</sup>。

正確には思い出せないが、ワイッツマンの書いたものに接したのはこれが最初ではなかったように思う。これもいずれこのシリーズの続編で詳しく述べさせていただくことになるが、私は東京藝大に在学中から何人かの先生に可愛がっていただき、とくに吉川逸治先生には格別に目をかけて頂いた。今では想像もできないことであるが、そのころ私は思いつくと、前もって御断りもせず鎌倉の御自宅にまで押し掛け、いろいろお話を伺ったものである（若い方のためにお断りしておくが、これは勿論私の生来の厚かましきの所為でもあるが、一面では戦前の大学生の間に折々見られた習慣の名残でもあった。その辺は、苦沙弥先生の所に朝な夕な現れる人たちの姿から想像されたい）。ある年の暮であつたろうか、先生のお宅に伺うと、紐で閉じた黒表紙の論文が、20冊以上もあるろうか、床の間にうず高く積まれていた。先生は、「これは全部国谷（誠朗）君のドゥーラ・ユーロポスの壁画についての論文で、彼がリヤカーに載せて持って来たんだが、参ったね。」というような話をされていた。

さすがその時には、その後お世話になる国谷さんの論文を拝見する機会はなかったが、間もなくその一部が『美術史』に掲載される<sup>7</sup>。ひょっとすると、その中に出ていた *Roll and Codex* のリファレンスを見たのが、ワイッツマンの名前と著作に接した最初だったかもしれない。それから間を措かず、立教大学の大学院に進学してから藤沢の国谷さんのお宅に伺い、原本を拝見させて頂いたことは確かである。しかしそのことと、ローズ先生に件の論文を見せて頂いたのと、どちらが先であったかは残念ながら思い出せない。ただ、*Roll and Codex* は非常に内容のつまった、かなりの量の著作であり、内容的にも、当時私がそれを読んでもすぐ理解できたとは思えない。それに

<sup>6</sup> M.M. Parvis, A.P. Wikgren (eds.), *New Testament Manuscript Studies*, Chicago 1950. その後以下の論文集に再録。K. Weitzmann, *Studies in Classical and Byzantine Manuscript Illumination* (ed. by H.L. Kessler), Chicago 1971, pp.247-70.

<sup>7</sup> 国谷誠朗「ドゥーラ・エウロポス、シナゴグにおける、所謂エゼキエル畫面の圖像學的研究」『美術史』35 (1960).

対し、ローズ先生に見せて頂いた "Narrative and Liturgical Gospel Illustration" の論文は直ちに読了し、美術史論文としてのその説得力、論理の明快さに心を奪われる思いであった。

私がクルト・ワイッツマンの学風に触れることとなったのは、このような次第であり、ローズ先生こそそのきっかけを作って下さった先生であった。もちろんローズ先生にお世話になったのはこのことだけではない。私は新約聖書ギリシャ語、教父学等いくつかのゼミや授業を取らせて頂いたが、とにかくひどい怠け者であった私はろくろく授業にも出ず、今思えば実にもったいないことをした。その点、京大の美学出身で、のちに神戸松陰の学院長になった荒井章三君は非常に真面目に、間もなく旧約聖書学を専攻する下地をしっかりと蓄えていた。

考えてみると、ローズ先生は以前からワイッツマンの名前を良く知っておられたに違いない、というのは、ワイッツマンは *Die armenische Buchmalerei des 10. und beginnenden 11. Jahrhunderts* を 1933 年にすでに発表しており、ローズ先生もこれを参照しておられるからである。また当時の立教大学キリスト教学科のライブラリーには、数少ない写本挿絵に関する本の中に Macler のエチミアジンの福音書の本があった<sup>8</sup>（今立教大学の Opac を検索してみると、Macler のほかに、Buschhausen によるファクシミル<sup>9</sup>も蔵されているが、当時私の見たのは確か Macler のものであった）。

因みに、当時のキリスト教学科のビザンティン美術関係の蔵書で今もよく覚えているのは、1911 年刊行の O. M. Dalton の概説書であった<sup>10</sup>。何故これを今もよく覚えているかという、この書には、例の「テオドロスの詩篇 London, Brit. Mus. Add.19352」の数葉が、非常に粗末な黑白写真ではあったが挿絵されていたからである。自分でもよく分からないが、私は今も昔も、日常においてだらしない生活を送りながら、建前として原理主義的なことを唱えるという、たちの悪い習性がある。私が「テオドロスの詩篇」に惹かれたのは、その当時ほとんど接することのなかった「禁欲的」な「修道院系詩篇本」独特の様式と図像に強く心を打たれたからである。ただ、Dalton の書以前に「テオドロスの詩篇」の挿絵を印刷物で見る機会があった。それは、藝大在学中の 1950 年代半ば、SKIRA による一連の西洋美術史の概説シリーズが出版され、東京藝大図書館もそれを早速購入したからである。それまで多くは、ひどい黒白の写真でしか見ることのなかった作品を、（今思えばこれもひどい色刷りであったが）オリジナルの色彩で見れるということは、二十歳の学生にとっては衝撃的な体験であった。とくにヴェネチア派の作品の印象は強かった。私は毎日のように図書館に通い、胸を弾ませてそのページを繰ったが、その SKIRA のシリーズの中には、やがて辻佐保子さんの師となるグラバル A. Grabar の書いたビザンティン美術の巻があった<sup>11</sup>。

<sup>8</sup> F. Macler, *L'évangile Arménien*, Paris 1920; id. *Miniatures arméniennes: vies du Christ, peintures ornementales (Xe au XVIIe siècle)*, Paris 1913.

<sup>9</sup> H. Buschhausen, *Codex Etschmiadzin*, Graz nd.

<sup>10</sup> O.M. Dalton, *Byzantine Art and Archaeology*, Oxford 1911.

<sup>11</sup> A. Grabar, *Byzantine Painting*, Geneva 1953.

しかし、SKIRA のシリーズ中には、「テオドロスの詩篇」からは一、二枚の挿絵しか載っていないのに対し、Dalton の書には数枚が見られ、しかも欄外挿絵 *marginal illustration* 固有の複雑な図像学的な関連がある程度想像出来るような解説であった。このように、11～12 世紀のビザンティン写本挿絵について実に臚げな知識を元にしてではあったが、初めて読んだワイッツマンの "Narrative and Liturgical Gospel Illustration" は、その思想的コンテクストはもちろん、様式と図像学的内容の巧みな体系化、そしてそれらの対比・類似を駆使した整然たる論理の展開は、これこそ自分の求めていた美術史学の方角だ、という確信を与えてくれた。その論文中で中心的な役割を演じていたのは、Paris, BN, ms.grec.74 と Vat. gr.1156 で、いずれも「修道院系詩篇本」に連なる、独特の線的な様式を備えていた。その後間もなく立教大学キリスト教学科の助手に採用された私は、直ちにワイッツマンのもう一つの代表作、『ヨシュア画卷』<sup>12</sup> を校費で買い求め、これも食るようにして読んだ。

言うまでもないことであるが、ワイッツマンが美術史家でありながらシカゴでの新約聖書本文批評の学会に招かれ、発表を行ったのは、彼がすでに *Roll and Codex* の中で、自分の写本挿絵の図像分析や *recension* 再建の方法が、もともとは聖書の本文批評の方法に拠っていることを明らかにしていたからである。こうして私は、思いがけないことに、本文批評を専門とされたローズ先生に導かれてワイッツマンの学風に親しみ、やがて彼の下で学ぶこととなった。その点でローズ先生は、自分の学風の形成という点で忘れることの出来ない恩師である。なお先生には、留学に至るまで御家族ぐるみでいろいろと親切にして頂いたが、それについてはまた後日記すこともあろう。とにかくその時以来、間を置いてではあるがローズ先生とは今日に至るまで折々交信を交わしてきた。そして、実に嬉しいことに、この度も 89 歳になられた先生から丁寧なメールのお返事を頂いた。御歳は取られたが、なお矍鑠として様々な聖書本文の訳本についての研究を続けておられ、このことをきっかけに、私に替って先生に電話をしてくれたプリンストン大名譽教授の清水義明君の話では、壮者に変わらぬお元気なお話し振りということで、懐かしい、あのちょっと辛口なユーモアも、昔に変わらぬようであった。

これから触れさせていただく師の方々についての思い出はあまりに多く、お一人一人についても、とても数葉の紙面をもって語り終えることは出来ない。ローズ先生の場合もそうであるが、一応ここで筆を措く前に、研究者としての人生の入口に立った私に、ローズ先生が身をもって示して下さった西欧の人文学研究者像を振り返っておきたい。それは、まず何を措いても、当時の私にとっては驚くべき勉強の量、それに耐えつつかつ家族や友人たちとの交わりを楽しまれる体力的、感情的な余力であった。またそれを支えていたのは、表には現れない厳しい自制力であった。

1950 年代初頭の日本の人文学者たちは、いろいろな点で、未だ敗戦と戦後の窮乏から十分立ち直ってはいなかった。美術史に関していうなら、戦後の平凡社の美術全集出版は、生活面では疲弊しつつも、戦前からの学問的蓄積を守り通してこられた先生方にとっては、ついに訪れた活

<sup>12</sup> K. Weitzmann, *The Joshua Roll: a work of the Macedonian Renaissance*, Princeton 1948.

躍の場であり、失礼を顧みずに申し上げるなら、経済的にも戦中・戦後の重圧から解放される最初のきっかけであつたろう。当時原稿の執筆をお願いに上がった編集者たちが、失礼に当たらぬよう、そつと衣類、食料品などをお届けしたというエピソードは、領域は違うが同じ芸術の研究者であつた父を見ていて、その話を肯げがう以上に、時代の労苦を痛い程思い出させるものであつた。

その点でアメリカ人でいらしたローズ先生は、当時のアメリカの研究者としてはむしろつつましい生活を送っていられたが、その背景であつたアメリカの学会、引いては文化活動そのものは、日本とは比較にならぬ豊かなものであつた。だが、その点を顧慮したとしても、ローズ先生が示して下さった研究者としての矜持、節制、集中力には今もって頭の下がるものがある。優れた西欧の研究者についてのこの印象は、その後数年にわたって欧米に学ぶこととなった後も、強まりこそすれ変わることなく今日まで続いている。そして、留学前の私に、このような優れた西欧の研究者達の生きざまを、さらにその内面から見せて下さったもう一人の師は三浦アンナ先生である。

### アンナ・三浦・Stange 先生

この節の筆を執るほんの一月ほど前、私は京都で行われる国際シンポジウムでの発表準備に忙殺されていた。そのシンポジウムは海外からも研究者を招いて、風景論に関する最も先端的な議論を紹介しようというものであつた。発表者のすべてが美術史家ではなく、哲学や都市論の専門家も招かれていたが、私は美術史家としてその機会に招かれたので、この数年もつぱら携わってきた初代のローマ皇帝アウグストゥス治下の風景画に関し、最新の知見を紹介しつついささかの自論を付け加えることとした。しかし、この主題に関しては、すでに一昨年ある程度まとまった論<sup>13</sup>を発表しているし、海外でも、古典期のローマ絵画に関しもっとも議論の交わされているところでもあるので、問題をアウグストゥス時代の風景画に限定せず、むしろ自論展開の将来を見据えて、より時代の下る、いわゆる古代末期固有の問題にも言及することとした。

一般に紀元後3～5世紀のいわゆる古代末期は、ローマ文化のあらゆる局面において、古典的伝統が急速に衰微した時代とされている。とはいえ、今日の研究史的状况を言えば、さすがに19世紀の美術史観とは変わって、この時代においてもまだまだ古代的伝統が地域によって生き続けていたし、あるいは、一旦は失われたものの、その復活の試みが随所でなされていたことが広く認められている。例えば、1970年代以降、ウィーンのスTROCKA V. M. Strockaの指揮の下で行われたエフェズスの、いわゆる Hanghäuser の発掘調査は、5世紀半ばに於いても、なお

<sup>13</sup> 『物語の道筋』を歩く―その Text, Moton, Visuality』 甚野尚志・益田朋幸編『ヨーロッパ中世の時間意識』知泉書館、2012年、211－242頁。



ポンペイやローマの古典期の作品を彷彿させる見事な古代の様式が息づいていたことを明らかにし、この時代を専門としてきた研究者を驚かせた<sup>14</sup>。

しかし、そうは言っても、やはり本来の古典古代の作品と4世紀以降の復古作品との間には、図像・様式の両面で歴然たる違いがある。私も一般的な見地に従って、遅くとも4世紀のローマ世界には、大筋において大きな変化が起こったと見ている。とは言っても、この変化は地中海世界全体の地域で均質に進行した訣ではない。それは急速に変化する社会構造の複雑さを反映し、一言ではとらえられない、万華鏡のような様相を呈している。私が、上述のローマ風景論の最後に触れたかったのは、このような文化全般に亘る変化、とりわけ最近の流行語でいうなら、「心性 mentality」の複雑極まりない変化の諸相であった。

だがこの度の私の目論見の中には、いっそう具体的な課題があった。それは次のようなアウグスティヌスの『告白』の一節にこそ、古代末期というこの critical な時代にあつて、自然の景観に対する活き活きとした心性が、率直、明快に現われている事実を示すことであった。すなわち、同書10章35節で、アウグスティヌスはしばしば彼を悩ませる「好奇心」の誘惑について次のように述べる。「犬が兎を追いかけるのを円形劇場で見物するようなことはもうありませんが（古代世界ではこのようないわゆる hare coursing が日常的に行われていたようである）、たまたま野原をとおっているとき同じことがおこったとしたら、何か重大な考えごとをやめて、その追いかけてごっこに気をとられるかもしれません。……家ですわっているとき、とかげがはえをつかまえたり、くもが網にとびこんだはえをまきこんだりするのに気をとられることがよくありますが、これはどうでしょうか。……私はこれらのものを見ると、そこから、万物を奇しくも造り秩序づけたもうたあなたを賛美せずにはいられなくなりますが……。 (Pergo inde ad laudandum te, creatorem mirificum atque ordinatorem rerum omnium, …….) (山田昌訳)」(この個所について、すでに物故されたものの、今なお敬愛の念已むことのない山田昌先生は、1953年の中公バックス版の中で次のように注してられる。「ここでアウグスティヌスはきびしく自分の好奇心を責めているが、彼は生まれつき自然現象にたいするいきいきとした観察力をそなえていた。そしてそれが彼の著作に独自の光彩をそえている。云々」と。)

私は少年時代から一貫して『告白』に親しんできた。しかし、とくにこの個所に注意を向けるように教えて下さったのは三浦アンナ先生である。記憶は定かではないが、それは確か先生と、同じアウグスティヌス著の『独語録 Soliloquia』を読んでいたゼミのある日のことだったように思う。正直に言って、その頃アンナ先生が、あの日本語とドイツ語の入り混じった不思議な言葉と独特の身振りで、一生懸命私たちに伝えようとしていらしたことを、無知蒙昧な私が正しく理解していたとはとても思えない。「アウグスティヌス言いました。犬が広い野原、走って行きます。きれいな緑の原。ついつい見てしまいます。でも、考えました。神様のこと忘れるのは良くない。蜘蛛の巣作るの、とても美しい。一生懸命見てしまいますね。でも、おお、アウグスティヌスま

<sup>14</sup> V.M. Strocka, *Die Wandmalerei der Hanghäuser in Ephesus*, Wien 1977.

た考えました。忘れてはいけないことある。……」

アンナ先生は、戦前ベルリンのフリードリッヒ・ヴィルヘルム大学において、前世紀最大の教義史家アドルフ・ハルナック A. Harnack の下で学ばれた。当時女性には固く閉ざされていた神学課程に初めて入学を許可された女性であり、ハルナックの愛弟子であったということは、研究者として並々ならぬ素質を備えていられたことの証左である。ベルリンでの研究の成果は、「ケルズスとオリゲネス：オリゲネスの『ケルズス論駁八書』における彼らの世界観の共通点」として 1926 年に出版され、今も初期教父思想研究に欠かすことの出来ない一書として、高い評価を保ち続けている<sup>15</sup>。この論文によってアンナ先生は、ドイツで最初の女性の神学博士となられた。

他方その論が出版されたとき、先生はすでに、当時ベルリンに留学中であった京都大学の建築学教授三浦<sup>あきら</sup>耀氏と結婚され、日本に帰化されていた。三浦氏が 1931 年に早世されてからは、先妻のお子さん二人と御自分がもうけられた御嬢さんの三人のお子さんを抱え、戦前から戦後にかけて大変な不自由を忍ばれたようである。しかも戦前の日本の大学は、外人教師とくに女性をその専門の業績によって採用することは殆ど皆無で、先生は研究者として第一級の経歴を積まれていたにもかかわらず、京都大学に於いては、最後までドイツ語の教師として勤務され、停年まで講師以上の待遇を得られることはなかった。実に勿体ないことをしたものである。しかし、先生の深い学殖、稀に見る温かで高雅なお人柄の故に、京大を中心とする学究の間では、先生を慕って学ばれた方の数は決して少なくない。近年になり、立教大学で、先生の名を冠した研究奨励基金を創設する際、予想以上に多くの方々から浄財をお寄せ頂いたが、それらの大部分はかつて京大など、関西の大学でアンナ先生の聲咳に接せられた方々であった。で、定年を迎えられた時、同じく京大出身で日本聖公会の思想的指導者であった菅田吉博士が、立教大学のキリスト教学科に芸術コースを設立するにあたりアンナ先生を教授として招聘されたのは、こういった経緯によるものである。

アンナ先生が何時頃から美術に興味を持たれるようになったのかについては、詳しいことは知らない。しかし、ベルリンの大学に在学中から興味を持たれていたことは確かである。20 世紀初頭のベルリンにおいて中世美術研究を代表していたのは、アドルフ・ゴルトシュミット Adolf Goldschmidt であった。アンナ先生は神学講座に学びながらゴルトシュミットの講義にも出席されたようである。あるとき先生とお話ししていて、その頃の美術研究に話が及ぶと、先生はゴルトシュミットの講義のノートを出して来て見せて下さった。レンブラントについての綿密な様式分析であったが、先生のノートの余白には、額が禿げ上がり、強い眼鏡をかけたゴルトシュミットの似顔絵がスケッチされていた。アンナ先生が仰るには、「ゴルトシュミットの講義、と一ても退屈でした。レンブラントの肖像画の手の部分のスライドを映して、それを指しながら、ずーっ

<sup>15</sup> Anna Miura-Stange, *Celsus und Origenes: das Gemeinsame ihrer Weltanschauung nach den acht Büchern des Origenes gegen Celsus : eine Studie zur Religions- und Geistesgeschichte des 2. und 3. Jahrhunderts*, Berlin 1926.



と話し続けて、わたし退屈してこのポートレート描きました。」ということであった。その時私は、間もなくプリンストンのワイッツマンの研究室で、同じゴルトシュミットの肖像画——但し今度はいたずら書きではなく、本格的褐色コンテによる肖像で、立派に額装されていた——を見出すことになろうとは全く予測していなかった。この肖像画を巡っては、いろいろ思い出もあるが、それはまた別の機会に触れることにしよう。いずれにせよ、アンナ先生とワイッツマンは、あまり時をおかず相次いでベルリンに在学し、アンナ先生はゴルトシュミットの講義に、ワイッツマンもハルナックの講義に出席されていたようである。

しかし、このエピソードが示すように、アンナ先生はたいへん美術を愛され、御自分でもたくさん作品を残されたが、美術研究者としてはゴルトシュミット—ワイッツマン流の、「医学に比すべき」厳密な「科学的」様式分析・比較にはあまり興味を持たれなかったようである。他方先生は、自分の美術研究を図像解釈学と位置付けていられた。因みに、この二、三十年の日本における図像学の流行を思うと信じられない話であるが、1950年代の日本では、「図像学」は西洋美術史の研究者にとっても、まだ耳慣れない用語であった。私は立教大学に在学中、アンナ先生の指導のもとでキリスト教図像学についての一、二の論文<sup>16</sup>を発表したが、その折日本のある先輩から、「君、良く人の嫌がる仕事をやりますね」と、励ましとも揶揄とも聞こえる言葉を頂いたことが今でも忘れられない。（私と図像学の関り合いについては、アンナ先生の御教導と並んで、パノフスキーの著作との出会いを忘れるわけにはいかない。さらにまた、その後時を俟たず、パノフスキーのゼミを取るようになろうとは想像もしていなかった。これについては次節のパノフスキーの項で詳しく述べたい。）

ではアンナ先生の言われていた図像学とはどのようなものであったろうか？ 三浦先生の場合、一般の美術史家と決定的に違うのは、先生が常にキリスト教図像学は神学の一部門であり、これに従属する学であるという見解に立っていたことである。確かに西洋近世にキリスト教図像学の端緒を開いたアントーニオ・ボジオなどは、キリスト教考古学者であり、19世紀に於いても図像学の主流はキリスト教図像学であった。そのことを思えば、アンナ先生がしばしば漏らされていた「図像学は神学の婢女 *iconographia ancilla theologiae*」の言葉も、いわれの無いことではない。だが先生は御自分の図像解釈学と、イコノロジーはもちろん伝統的キリスト教図像学との間にも、明確な一線を引かれていた。先生の著作の中には、例えば1961年に『美術史』に掲載されたサン・タポリナーレ・イル・ヌオーヴォのキリスト伝モザイクに関する論文<sup>17</sup>のように、ある特定の作品の図像学的特色を論じたものもある。だが先生の和文となったキリスト教美術に関する著作の多くは、多数の短いエッセイを連ねたような形になっていて、しかもそのエッセイのテーマは実に多岐にわたっている。そこから一貫した主題を把握することは決して容易ではな

<sup>16</sup> 例えば「キリスト教図像学研究史の概略」『キリスト教学』3 (1962)、立教大学キリスト教会。

<sup>17</sup> 「創り出されしイエスの一人の弟子—聖アポリナーレ・ヌオーヴォのモザイク群 (520年) に見る」『美術史』41 (1961)。

い。

先生は御自分の学問的方法については、めったに書いたり語られたりはなさらなかったが、先生の代表作のひとつ、『芸術に現れたヨハネ』（岩波書店 1954 年）では、「自分の関心は、実在する特定の作品について、いわゆる図像学的な変遷をたどることではない」として、結論部分で次のように述べておられる。「ヨハネは空想に駆られる人間であった。そしていまの場合にも彼を捉え、そして幾百年の経過の後にも、彼をして、古代人が極めて重要視したかのファーマー（fama 噂の女神）の王国において、一つの精神形態……たらしめたのもまた、再び、空想であったのである。……この精神形態、一千年以上もたつて、しかもなお未だに成長しきつてはいないこの樹木、すなわち生時および死後における「全體のヨハネ」を輪郭づけること、それこそわたしがこのこの著述をもってひそかに追求しようとした、究極の、そして最も大膽な目標だったのである。」

確かにこれは驚くべき大膽な試みである。先生の図像解釈学が、特定の図像作品について云々することではないことは勿論であるが、先生が対象として選ばれたヨハネは、なんとその人物自体、さらにはその像が、あるとき誕生して以来刻々に成長し、これからも、ことによると永遠に変貌を遂げて行く「精神形態」としてのヨハネなのである。ひょっとすると先生には賛成して頂けないかもしれないが、私はこの「精神形態」を、自分にとって分かりやすくするために、敢えてイメージと呼びたい。しかし、このイメージは、いわゆる word and image という風に言われるイメージとは違い、かつて生き、いまも生き、これからも生き続けるであろう、言葉の最大限の意味におけるイメージである。そしてアンナ先生は、上の引用に続く部分で、この生成してとどまるところのないヨハネのイメージの意味を解く手がかりとして三つのタイプの文学を挙げられる。それは 1) 新約的書物の**註釋**、2) 聖書外典に発する**伝説文学**、3) グノーシス的・神秘主義的書物の展開としての**神智学 Theosophie** である。注意したいのは、これらすべてが、——例えば正典化された聖書のように——一定の不変の形を取った文学ではなく、そこから発して絶えざる変貌の過程を、かつて辿り、今も、そしてこれからもなお辿り続ける文学である点である。しかし、問題とするのが、このように不斷に生成して熄まないイメージであるとするなら、その生成変化を一時的にもせよ一旦停止し、客観的、脱時間的なモードにおかなければ、いわゆる学問的な記述、解釈が不可能なことは目に見えている。その点で三浦先生のチャレンジは、アカデミックな立場を墨守する人の目には無謀とさえ映る。だが思っても見よう。そもそもイメージというものは、アンナ先生が言われたように、想像力を母として誕生するものではなかったか？そしてその時から、歴史の流れの中で育ち、成長し、転生を繰り返してきたものではないか？それを、あたかも時間の流れから逃れ、永遠に同じ姿をとどめているとすることこそ、近代科学の臆見というものではなからうか。

さらにまたここから分かるように、アンナ先生のような視点に立つ時、もっとも意味深く、かつ活けるものとしての力を発揮するイメージは、今ここに立っているその解釈者の心の中で、息づいている、そのイメージに他ならない。そしてアンナ先生の場合、そのようにして生き続けて

いるヨハネという「精神形態」／イメージの意味を伝える言葉は、先生が最後に挙げられた「グノーシス的・神秘主義的書物の展開としての神智学 Theosophie」の系譜を引く言葉であったはずである。先生がシュタイナーに興味を寄せていられたのは事実である。しかしここでいう神智学を、ただにシュタイナーのそれに帰することは誤りであろう。先生の神智学がより直接に連なるのは、先生の著作の随所に現れるドイツ神秘主義文学の系譜であった。そこには、ドイツ精神の骨肉ともいえる自然への深い関わり合い、畏怖と賛美の入り混じった底知れぬほの暗い世界があった。

実際アンナ先生の自然に対する態度には、殆ど日常を越えたものがあつた。先生は私たちと一緒に歩かれる時も、舗装の上を避け、極力地面の露われたところを歩まれた。先生の保谷のお宅の庭には、さまざまな植物が雑多に生い茂り、先生はそれを日本流に刈り込むことを終始拒否していらした。勉強に疲れると、先生は部屋ばきのスリッパのままその庭に出て、小さな菜園を耕しておられた。そういうお暮らしだったから、失礼だが、先生のお宅のフロアには何時も土埃が積もっていたが、先生は少しも苦になさらず、クリスマスにはそこで、人工の装飾品などを使わず、小さいリンゴや松の実などの自然物で樅の木を丹念に飾られた。小さな練炭ストーヴの燃えるお部屋で、先生手作りのドイツ風のサンドイッチを齧りながら、何カ月もかけて、先生が愛して熄まれることのなかったリルケの『マルテの手記』と一緒に読んで頂いたあの時間こそ、私の少・青年時代の思い出の中で忘れることの出来ない幸いの時であつたと、今にしますます思うのである。

前節に記した思い出のローズ先生と同じく、アンナ先生は、何時何つても、絶えず勉強をしておられた。私たちのような訪問者を迎えたときとか、お庭の菜園に鍬を入れられるとき以外は、冬であれば先生は何時もあのストーヴの上に毛布をかけられ、俯きがちに書を読み、ノートを取っておられた。そして、私がプリンストンに発つた後、先生はおそらく脳梗塞で倒れられ、そのはずみにあの練炭ストーヴ（あるいはそこに掛つていた薬缶のお湯）でひどい火傷をされたと聞いた。最後に私が 1963 年の夏、短期間日本に戻り先生をお訪ねした折は、先生は床に絨緞のようなものを敷いてやすんでおられた。悲しいことに、ただでさえ分かりにくかった先生の言葉は、聴き取るのも難しかったが、先生がブリューゲルの作品について何か一生懸命言おうとしておられることだけはよく分かった。先生の訃報を知ったのは、プリンストンに戻って暫らくしてからのことである。

ハルナックの下で研究に従事されていた頃の思い出については、これも残念なことにあまり多くを伺う機会はなかった。その数少ない思い出話の中で今も忘れることのないのは、1920 年代のハルナック家のサロンの話であつた。アンナ先生が思い出されるままに触れられたサロンの客たちの多くは、当時の第一流の知識人のみならず、芸術家の名前もあつた。やがて私がワイッツマンの下で学ぶようになった時、ウィラモヴィッツ (Ulrich von Wilamowitz-Moellendorff 二十世紀前半に活躍したドイツの大古典文学研究者) の名前を聞いて何か懐かしいものを感じたのも、アンナ先生のお話を聞いていたからに違いない。「ゲオルグ Stefan Georg も来て、自分の詩、朗

読しました。それはもう偉いものでした」。晩年のアンナ先生の脳裏には、あるいはその夜のハルナック家のサロンの光景も浮かんでいたであろうか。